



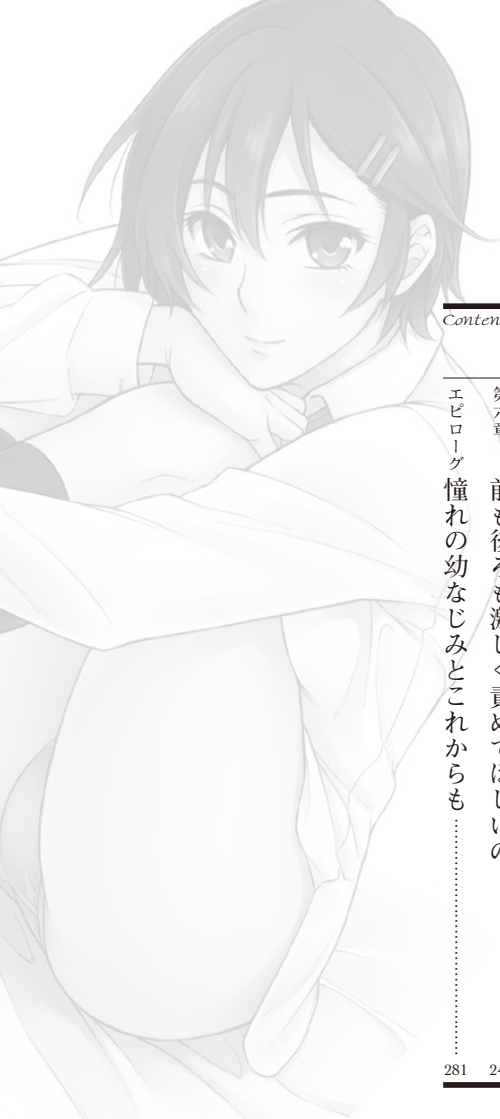
ご褒美は柔肌で

憧れの幼なじみは生徒会長

天草白

挿絵／孤裡精

立ち読み版



第一章	憧れの幼なじみは生徒会長	4
第二章	体育祭で介抱エッチ	62
第三章	会長の家でヒミツのお勉強	111
第四章	机の下でいけない悪戯	164
第五章	もう一つの処女をプレゼント	204
第六章	前も後ろも激しく責めてほしいの	243
エピローグ	憧れの幼なじみとこれから	281

登場人物

Characters

倉本 達也

(くらもと たつや)

小松山学園一年生。素直でお節介な性格。小学校までずっと一緒だった幼なじみの美紗緒に淡い憧れの念を抱いている。

藤崎 美紗緒

(ふじさき みさお)

小松山学園三年生で生徒会長。勝気で行動力に溢れ、目的のためには妥協も容赦もしない性格。幼なじみの達也とは学園で三年ぶりに再会する。



先ほどから保健室にいるはずの養護教諭の姿が見えない。

ああ、と美紗緒は思い出したように、

「保健の町村先生は用事でしばらく席を外すそうよ」

「じゃあ二人つきりか……」

他の教師も皆、体育祭で出払っているだろうし、ここは完全に無人だ。

「やだ、それ……!」

美紗緒がハッと何かに気づいたように口元を押さえた。

気が付けば、股間の高ぶりが布団をテント状に押し上げている。

達也はばつの悪い思いで目を逸らした。

「い、いや、これはその……」

「しよがないわね、達也は」

美紗緒はクスリと笑って、二人つきりのときの口調に変わった。

「今日は特に頑張ってくれたし、たっぷりのご褒美をあげるわ」

「ご、ご褒美?」

期待感でたちまち全身が、かあつ、と熱くなった。

さすがにこの状況で、手作り弁当のご褒美ということはないだろう。

(……いや、美紗緒のことだからあり得ないとは言いい切れなけれど)

「大丈夫よ、ちゃんとあなたが期待しているものをプレゼントするから」

そんな達也の気持ちを読んだかのように。美紗緒が笑みを深くする。

「じ、じゃあ——」

彼女からエッチな『ご褒美』をもらうのは、生徒会室で初体験をして以来、一ヶ月ぶりのことだ。美紗緒はそつと手を伸ばし、短パンの上から手のひらで達也の股間を撫でさすった。

「ううっ」

布地越しにペニスに訪れる甘やかな圧迫感がたまらない。肉棒の芯に蕩けるような快感の波が突き抜けた。

直接的な刺激もさることながら、憧れの少女に触れられているという精神的な充足と、一ヶ月溜めこんだ美紗緒への欲情が入り混じり、達也は興奮の喘ぎを漏らす。

さらに二度、三度。

短パン越しに撫でられるたび、すでに七割がた勃起していたペニスが一気に限界まで膨張し、内側からはちきれんばかりに脈動を強くした。

「やだ、こんなに大きくして……！ この間も思ったけど、男の子のつて本当にすご

いのね」

美紗緒は小鼻を膨らませて、ふうっ、と熱いため息をついた。いきなり達也の短パンに手をかけると、トランクスごと一気にずらしてしまう。

「あっ……」

寝そべっている上に脱力状態だった彼には、ほとんど抵抗することもできない。アツと思ったときには下半身を丸出しにされていた。スースーとして落ち着かない気分だ。

しかも美紗緒にまじまじと裸の股間を覗きこまれ、羞恥で頬が熱くなる。

「み、美紗緒……」

「えっと、今度は直接——」

悩ましげな吐息混じりにつぶやきながら、美紗緒が剥き出しになった太幹にゆつくりと顔を近づけた。さすがに二度目だけあって、前回ほど躊躇せず亀頭にチュツと軽くキスをする。

「くうっ！」

甘い痺れが先端部に走り、達也は背中を弓なりに反らした。

「んっ、しょっぱい……汗の味」

目を細めながら、赤黒い先端部の丸みに沿って舌を這わせる美紗緒。

温かな舌肉が亀頭に巻きつき、火照った表面を優しく舐める。ぴちゃ、ぴちゃ、と無人の保健室にエッチな水音が響いた。

「ふうう、ううっ、気持ち、い……あうっ」

性器を口奉仕される心地よさにうっとりとした達也は、そこであることを思い出して表情をこわばらせた。

「ま、待って。やっぱり、観月先輩って人に悪いし……」

そう、美紗緒には憧れの先輩がいるのだ。

もしかしたら今でも片思いをしているのかもしれないし、達也が知らないだけで付き合っているのかもしれない。

そんな相手を差し置いて、恋人でもない自分が彼女にエッチな行為をしてもらうのは、さすがに気が咎めた。

「ちゅ……えっ、先輩がどうかしたの？」

ペニスから唇を離し、美紗緒がたずねる。

達也は気まずい思いでその顔を見つめながら、言った。

「憧れの人なんじゃないのか。その、こ、恋人同士だった……とか？」

「……ふふ、気になる？」

美紗緒が目尻を下げて、どこか小悪魔的な笑みを浮かべる。

「気になるっていうか」

「もしかしてヤキモチとか？」

「ち、違うって！ だから、その……」

凶星を指されてしどろもどろになってしまう。

「馬鹿ね、気にしなくてもいいのよ。それよりも、ご奉仕の続きをしましょうか」

「あ、ああ」

妖しい微笑を浮かべる美紗緒を目にした瞬間、達也はほとんど無意識に上体を起こしていた。

嫉妬も罪悪感も頭の中から捨て去り、今は彼女との行為に集中することにした。さつきまでへばっていたのが嘘のように、期待感で下腹がカッカと火照り出す。我ながら現金だな、と自分で自分に呆れるほどだ。

同時に、太さと硬度を増した肉棒が今まで以上の急角度でムクムクとそそり立つ。赤黒い鎌首を美紗緒の前でもたげ、ヌラヌラと濡れた先端部を物欲しげに揺らす。さすがに美紗緒も目を丸くした。

「た、達也……?」

「あ……」

自分のがつつき具合に、猛烈な照れが湧く。

「もう、達也ったら」

苦笑を漏らした美紗緒は、ベッドに寝そべった達也の下半身にあらためて覆いかぶさってきた。

体操服の隙間から、吸いこまれそうなほど深い魅惑の谷間が丸見えになる。

（ほ、本当にすごいおっぱいだ……!）

思わず覗きこんでしまい、それに反応して、びくん、と勃起した怒張器官が垂直に跳ね上がる。

体操服の厚手の生地を内側からダイナミックに押し上げる肉の双丘。達也の目はどうしてもその見事な膨らみに惹きつけられてしまう。

「そ、そんなに……気になるの、私のおっぱい?」

視線に気づいた美紗緒が、恥ずかしそうに息を漏らす。

「ねえ、口じゃなくておっぱいで……してあげよっか?」

「えっ、本当に——」

達也は身を乗り出した。

美紗緒はますます頬を赤く染めてコクンとうなずくと、体操服をブラジャーと一緒になくし上げて裸の乳房を晒した。

「うわ……あつ」

達也は目を皿のように開き、眼前に出現した素晴らしい光景を網膜に焼きつける。

初体験のときにも目にした、憧れの少女の生の乳房。

形の美しさも豊かな量感とともに絶品なのは前回すでに確認済みだが、二度目といつても彼女の乳肉を目にした感動が薄れることはなかった。

こんもりと盛り上がった二つの乳肉が、ふるん、とつきたての餅のように瑞々しく揺れている。

それを凝視し、ごくり、と生唾を呑みこむ。

「んっ……」

裾野を手のひらで支えるようにして、重たげなバストを達也の股間に乗せる美紗緒。ずっしりとした質感がたまらない。

（す、すごい眺めだ！）

豊かに盛り上がった二つの肉丘が自分の下腹に乗っているのを見ると、あらためて

その迫力を感じ取ることができる。

興奮でビクビクと震える。ペニスはさらに硬度を増し、赤黒い亀頭の頂点では鈴口がぱっくりと開いて、そこからヌルヌルとした透明の液体が漏れ出してくる。

欲望の先走り液から立ち上るツンとした生臭い体液の香りが、鼻先にまで漂ってきて淫靡な気分を高めた。

いよいよ美紗緒の乳房が自分の分身器官を包み、摩擦し、愛撫し、奉仕してくれる。

想像するだけで、淫らな期待感が下半身を甘く陶醉させた。

「ヌルヌルしたのが溢れてきたわね、ふふ」
先走りの欲望液の匂いを感じ取ったのか、美紗緒は淫蕩な笑みを浮かべると、バストに添えた手に力を込め、二つの肉丘を、たぶ、たぶ、と柔らかそうに揺らしながら、そそり立つ幹へと近づけていった。

「ううっ」

肉棒全体に期待通りの柔肉の感触が訪れた。

はちきれんばかりに膨らんだ双乳が、ほとんど垂直にそそり立った肉の幹を左右から挟みこむ。

丸い二つの乳房がぶつかった中央に男根がサンドイッチ状態で収まっており、大部分が埋まっている。わずかに顔を出した赤黒い亀頭は、とめどなくあふれるカウパーでテラテラと艶めかしい光沢を放つ。

「こ、こんな感じで……いいかしら？」

おっかなびっくりといった様子で、美紗緒が左右の乳房を外側から手で押して、ペニスへの圧迫を強める。

「うああっ、や、柔らかい——」

手や口、膣の中のような締めつけ感はないが、柔らかい圧力と圧倒的な肉の量感で性器を包まれる感触は、まさしくパイズリ独特のものだ。

さらに、中央でぶつかって潰れた乳肉のいやらしいフォームの視覚効果が達也の欲情をさらに炙る。

「いいよ、美紗緒っ……」

達也は興奮にかすれた声で、それだけを口にした。ペニスの先端から根元までを熱く蕩けた乳肉が覆っている。

たぶん、たぶん、とダイナミックに乳房を揺らしてパイズリを始める美紗緒。

柔肉で周囲をみっちりと塞がれ、四方から圧迫される肉棒にはスローな快楽がじわ

じわと蓄積していく。

「くううっ……気持ち、いい」

一気に性感を高められるわけではなく、焦らされるように肉悦が上昇していく感覚は、じれったく、もどかしく、達也は腰を間断なく揺らしてしまふ。それはさらなる快楽を求めての、半ば無意識の動作だ。

「わ、私のおっぱい……んっ、そ、そんなに……気持ちいいの……?」

美紗緒は上目遣いに彼を見上げながら、なおも二つの柔肉を揺らして深い谷間に挟んだペニスを甘く摩擦していく。

「ん……ふぁ……あぁ」

その摩擦によつて、美紗緒もまた快楽を得ているらしい。真っ白いパイケーキみただった乳房はいつの間にか鮮やかな蔷薇色に紅潮していた。

ちろり、ちろり、と時折舌で唇を舐めながら、美紗緒は乱れた息を吐き出して乳奉仕を続行する。

荒くなつた息が亀頭に吹きかかり、くすぐつたさが緩やかな快感となつて表皮を痺れさせた。

びく、びく、と柔肉に包まれたペニスが不規則に脈を打つ。

「ちゅ、んっ……ヌルヌルしたの、出て……ちゅばあ……」

さらに乳房の狭間から飛び出した赤黒い先端を、チロチロと尖らせた舌先で突いてくる。ただでさえ敏感さを増している鈴口が愉悅の震えとともに、くぱあっ、と大きく開ききる。

そこから、さらに量を増して漏れ出すトロトロのカウパーは、もはや肉棒の先端にとどまらず、接触している周囲の乳肌、そして美紗緒の舌や唇までをテラテラに濡れ光らせた。

（うわぁ、美紗緒、すごくエロい顔……!）

カウパーで唇を濡らしながら、興奮をあらわにパイズりする幼なじみの姿に、背筋がゾクリと震えた。

興奮が肉悦を倍加させ、弾力豊かな肉球に隙間なく挟まれた肉棒は、びくん、びくんと官能の痙攣を繰り返しながら最大サイズにまで膨張する。

このままイッてしまいそうだった。

「ふふ、本当に気持ちよさそう……!」

美紗緒はそんな彼の衝動を感じ取ったのか、さらに乳房の動きをスピードアップさせる。



あの誇り高い生徒会長が自分の股間にうずくまり、乳房を剥き出しにして奉仕してくれている——そんな構図が達也の征服感を疼かせた。

みっちり肉の詰まった二つの丸い乳房が、たわわに揺れながらペニスを挟み、前後運動でしごいては、柔らかな摩擦感を送りこんでくる。

じわじわと高まる肉悦で尿道口が開き、ぬるりとした先走りのカウパー液がとめどなく漏れ出す。

ぬちゅ、ぬちゅ、ぐちゅうううううつ。

大量の欲望液が潤滑油になり、美紗緒のパイズリはさらに速度を増した。

重量感あふれる二つの肉球が中央に寄り、コリコリになった左右の乳房が敏感な亀頭粘膜を擦り立てた。乳肉の柔らかさと乳首の硬さ、二つの異なる触感によるパイズリ摩擦がペニス全体を甘い電流で包んでいく。

「うああっ、そ、それ、気持ちいいっ……あ、くはあっ」

複合的な刺激で官能を揺さぶられ、達也はたまらずに悲鳴を上げた。

射精感が緩やかな上昇曲線を描き、ゆっくりと頂点に達する。

「ぐうっ、イク……!!」

エクスタシーの呻き声とともに、達也は下半身を硬直させた。

(こんなに濡れてたんだ。これなら一気に入るかも……)

フェロモンにあふれた香りに誘われるように、達也はさらに力を込めて人造の性器を肉孔の最奥までずぶずぶと差しこむ。粘膜を内側に巻きこみながら、バイブが腔洞を進んでいく。

「んっ、ふああっ……!!」

深く貫かれた美紗緒はM字開脚の姿勢のまままで全身を震わせて喘いだ。

「こ、これ……達也のと、感じが違……ううっ、あんっ」

セックスのときのように、快楽のままペニスを打ちこむのとは違い、バイブレーターを小刻みに動かして、美紗緒がより快感を得られるスポットを探していく。

「あ……うあっ、んんっ」

深く突き入れればスラリとした下肢が跳ね、浅瀬でズボズボと出し入れすると、また腰が左右にくねる。どうやら腔内の浅い部分にも最奥にも、それぞれ感じるポイントが存在しているらしい。

浅く、深く。強く、弱く。達也はバイブの位置や挿入角度、ピストンの強弱を何度も微調整し、美紗緒が気持ちよくなれる場所を探っていく。

「だ、駄目、そこ……も……あうんっ!」

普段の勝気さが崩れかけ、美紗緒は口の端から涎を垂らして喘いだ。

「あれ？　ここも気持ちいいんだ？　じゃあ、ここは——」

女の体には、まだまだ達也の知らない性感帯が無数に眠っているのかもしれない。未知の宝を発掘しているようなワクワクした気持ちに胸を高鳴らせながら、達也は憧れの少女の秘孔をバイブでえぐっていった。

と、

「そ、そろそろ……はあ、はあ……時間よ」

息も絶え絶えの美紗緒が、最後の理性を振り絞ったかのように宣言する。頬や首の辺りには珠の汗が浮かび、黒髪が一筋二筋べったりと貼りついていて、女子校生らしからぬ色香を醸し出していた。

「次は……ふうっ……英語の問題集に移りましょうか」

「えっ、もう終わり？　もうちょっと、このまま……」

「駄目。今日の目的はあくまでも勉強でしょ。そちらがおそろそかになったら本末転倒じゃない」

美紗緒が腰をひねると、ちゅぽん、と音を立てて、バイブが抜け落ちた。

「……ケチ」

「何か言ったかしら、達也？」

「ひいっ、笑顔でこめかみピクピクするのはやめて!! マジで怖いから！」

「ほら、さっさとやりなさい。また二十問解けたら、ご褒美の続き……していいから」

手早く服を着直しながら、ぼっと恥ずかしそうに頬を染める美紗緒を見て、俄然やる気が復活した。本当に現金だと自分で自分に呆れてしまう。

そして——苦手な英語の問題集をなんとか二十問解き終わり、ノルマを達成すると、達也はふたたびテーブルの上に並べられたアダルトグッズを物色した。

（今度は何を使おうかな）

横で、幾分緊張気味の顔で待っている美紗緒に視線を向け、内心でほくそ笑む達也。彼女は先ほど同様にブラジャーを付けただけの姿だ。

「あれ、これって——」

数珠のようにいくつつかのビーズをつなぎあわせた道具が目に残った。手に取ってみる。

確かアナルビーズといって、尻穴を責めるための道具のはずだ。

「もしかして美紗緒、お尻でのエッチにも興味あるとか？」

「えっ、お尻……?」

「意外とアブノーマル趣味なんだ？」

美紗緒は首をかしげた後、達也が手にしたアナルビーズを見て、あつと口元を押さえた。

「ち、違うの、それは、えつと……間違えて……そう、間違えて買っちゃったのよ！さすがにお尻で、なんて……へ、変態みたいで……その」

「そうかな？ 気持ちいいかもしれないし、やってみる？」

「えっ……」

美紗緒はふいと横を向いたが、積極的に嫌がっているふうでもない。

達也は彼女の背後に回りこみ、豊かに張った臀部に手をかけた。

「やっ……やっぱり、駄目……！ 恥ずかしい——」

「練習問題二十問解くごとに美紗緒の体に悪戯していい、って約束だろ？ 生徒会長が約束を破ってもいいの？」

弱々しい懇願で首を振る美紗緒に意地の悪い質問をぶつけてみる。生徒会長という言葉を持ち出されると、美紗緒は弱いはずだ。

案の定、

「くっ、分かったわよ」

悔しがっているとも自棄^{やけ}ともつかない顔をしてその場に四つん這いになると、桃尻を高々と掲げた。

ぷりん、ぷりん、と揺れる肉づきのよい尻の双丘を両手で掴み、グツと押し広げて、その谷間の奥をあらわにする。綺麗な放射状の皺で飾られた薄ピンク色の蕾は、排泄の器官とは信じられないほど美しかった。

「そ、そんなに見ちゃ……嫌」

不浄の場所をまじまじと覗かれ、恥ずかしそうに全身を左右にくねらせる美紗緒。達也は恥じらう彼女が可愛らしくて、先端の一番小さなビーズを不浄の裏穴にそつとあてがった。

あらかじめ彼女が用意してあったローションを垂らし、滑りをよくした上で、ぐつ、ぐぐつ、と繊細な粘膜を傷めないよう配慮しながら、少しずつ差し入れる。小さな窄まりがゴムのように伸び広がり、ビーズを呑みこみ始めた。

「んっ！」

侵入してきた異物に反応し、肉づきのよい腰回りがびくんと跳ねた。

ローションのおかげもあってか、どうやら違和感はあるても痛みはないらしい。それどころか、可愛らしい菊孔は、ひく、ひく、と開閉を繰り返しながら、もつと深い

侵入を求めているようにすら見えた。

「もっと入れるよ」

達也は調子に乗って、ビーズをさらに押し進めていく。ヌルヌルの潤滑剤の力も借りて、少しずつ奥へと侵入させた。

「す、すごい、お尻の穴が広がって——」

ごくり、と息を呑んだ。

本来なら性的な目的で使うはずのない場所に淫具を挿入している。排泄の場所に侵入される気恥ずかしさで大好きな少女が身悶えしている。

そんな禁忌の行為を見下ろすのは、たまらなく刺激的だった。背徳的とすら思えてしまう。

（あの美紗緒のお尻に、エッチな道具を入れてるんだ……！）

達也はタブーを犯している感覚に陶醉しながら、一つ、また一つとビーズを押し入れていった。

ビーズが入るたび、膣から蜜があふれ出る。充血して鮮やかな赤に色づいた肉の唇が、肛門への刺激によって喜んでいるかのように、小刻みな痙攣を繰り返した。

物欲しげに口を開き、綻びをみせる膣口から透明な樹液がトロリと垂れ落ちる。甘



酸っぱい匂いが室内に振りまかれた。美紗緒の興奮の証を嗅ぎ取り、陶酔を覚えながら、達也はさらにビーズを押し入れる。

「ち、ちよつと、やめ……あうんっ」

ひく、ひく、と収縮する括約筋に食い締められて、ビーズが先に進まなくなる。思った以上の抵抗感だ。

さすがに、無理に押しこむわけにはいかない。

達也はゆつくりとビーズを引き抜き始めた。腸壁がうねりながら、異物を押し出すの手伝う。

「んっ、ふあぁっ……あんっ、擦れるう」

引き抜くときに美紗緒が甘い声を上げた。肛門からビーズをひり出すという疑似的な排泄行為が、彼女に快感をもたらしているらしい。

達也はビーズの先端が菊孔から外れそうなところまで引き抜くと、ふたたび押しこみ始めた。

「えっ、また……!! はぁぁぁぁ、んはぁっ」

じゅぽ、じゅぽ、と淫猥な湿音を立てながら、ビーズを尻穴の浅瀬で抜き差しする。ブラジャーを着けただけの半裸の上半身が脱力したように突っ伏した。その反動で真

つ白い尻丘をますます高く掲げる格好になる。

目の前で揺れる尻肉の淫猥さに欲情を刺激されながら、達也はビーズを操る手に力を込めた。潤滑剤の助けも借りて、少しずつ速度を上げていく。

「ああつ、あ、変な……あ、感じ……はあ、はあ……」

腰全体が痙攣し、豊かな尻肉が、たぶ、たぶ、と揺れている。日焼けとは無縁の白い尻にはうつつすらと汗さえ浮かんでいた。

「こんな、どうして……私、お尻を弄られてる、のに……あ、うんっ……ふあ、気持ちよくなっちゃう……はああああ……」

背中越しに振り返った美紗緒は額に汗を浮かべ、ほつれた髪が一筋、頬にべったりと貼りついていて、口の端に光る唾液が唇までをヌラヌラと輝かせて、たまらなく艶っぽい。

（もつと奥まで——）

この未通の器官を開発してみたい。気持ちよくさせたい。

幼なじみの淫靡な表情に征服欲を刺激され、達也はビーズをグッと押しこもうとする。

そのとたん、

「や、あああつ……!? 駄目っ、それ以上はああつ……!」

美紗緒は狼狽の声とともに、腰を激しく打ち振った。

三つ目の玉まで嵌まっていたアナルビーズは肛肉に押し返され、ちゅぷ、と音を立てて抜け落ちてしまう。

「はあ、はあ……も、もうっ、いくらなんでもやりすぎよ、達也!」

顔を真っ赤にして怒声を浴びせる美紗緒だが、その声にはいつもの迫力がなかった。やはり今のアナル愛撫に相当驚いたのだろう。彼女がここまでうろたえるのは珍しく、達也はひそかに内心で達成感のようなものさえ味わっていた。

「ごめん、美紗緒」

「悪戯してもいいけど、お、お尻はこれ以上駄目だからね? 約束よ」

「ああ、もうしないって」

苦笑混じりにうなづく達也。

が、その答えとは裏腹に、

(もしあのままお尻を弄り続けてたら、美紗緒、どうなっちゃってたんだらう——)

そんな衝動が心の中にくすぶっているのも事実だった。そしてアナルビーズではなくペニスを挿入したら、この真面目な幼なじみはどんなふうにならん、淫らな姿態を見

せてくれるのか——。

まあ、これ以上同じことをしたら、今度こそ本当に怒られそうなので自重することにする。

——そして、ふたたび問題集と格闘する時間へと戻った。

その後も、二十問解くごとに達也はアダルトグッズを使って美紗緒に悪戯し、部屋の中には濃厚な牝の香りが漂うほどになっていた。テーブルの上に置かれたパイプやローターは愛液にまみれて、テラテラと淫靡な光沢を放っている。

「ふう、これで今日のノルマ達成……と」

美紗緒が設定した問題集のノルマをすべて終わると、達也は大きく伸びをした。

「……って、もう七時!？」

壁に掛けられた時計を見ると、すでに七時を回っていた。間に『ご褒美』を挟んだとはいえ、かれこれ三時間ほど勉強していたことになる。

「頑張ったわね、達也」

「俺、普段は三十分も集中力がもたないのに……」

「……それはそれで問題だと思うけど」

美紗緒が軽く眉をひそめ、それから一転してにつこりと笑った。

「やればできるのよ、あなたは」

「美紗緒のご褒美が効いたのかな、はは」

「私も体を張った甲斐があつたかしら」

二人で笑いあう。

考えてみれば美紗緒は今回のことだけではなく、生徒会の仕事でも達也の頑張りに対し、体を張って報いてくれていた。

職務を全うするために彼をこき使つたりもするが、一方で『部下』である達也のことも、ちゃんと案じてくれて――。

あらためて美紗緒に対する感謝と尊敬がこみ上げる。

「ありがとう、美紗緒」

「……何よ、あらたまつて」

不審げに顔をしかめた美紗緒は、それから笑顔に戻つて達也をねぎらつてくれた。

「今日はこれで終わりにしましょうか。お疲れさま、達也」

ふいに、チラリとドアの外に視線を向ける。

「ん？」

「ノルマを達成したから、最後にとっておきのご褒美をあげるわ」

「ご褒美？」

達也からすれば、美紗緒への数々の『悪戯』ですでに十分すぎるほどのご褒美をもらったつもりだったが。

「いいから。ついてきなさい」

「あ、ああ」

訝りながら、美紗緒に案内された場所。

そこは、浴室だった。

広いバスルームにはもうもうたる湯気が立ちこめ、美紗緒の白い裸身を煙らせていた。水煙を透かして見える魅惑の双丘や股間の陰り、スラリと引き締まった肢体がゾクリとするほど艶めかしい。

対する達也も全裸で、風呂場用の椅子に腰かけていた。

（まさか美紗緒と一緒に風呂に入ることになるなんて）

妖しい期待感と欲情が下腹をゾクゾクと疼かせ、肉棒を硬化させる。

そう、これが美紗緒のとっておきのご褒美——風呂場での奉仕——だった。

「じ、じゃあ始めるわね。達也は動いちや駄目よ。私に全部任せて……」

緊張を含んだ声で宣言すると、美紗緒は彼の右腕を跨いだ。ゆっくりと腰を下ろし、股間を肘近くに密着させる。

（ううっ、当たってるよ……美紗緒の、アソコ）

肌に直接当たっている秘所の感触が欲情をたぎらせた。海綿体が充血を強め、若いペニスにはムクリと起き上がる。

「んっ……ふうっ」

美紗緒は秘所を擦りつけるようにして、達也の上腕部から手の甲までを往復し始めた。ぎこちない動きながらも、熱いクレヴアスとシヤリシヤリとした陰毛の感触が心地よくて、腕全体にぞわりと鳥肌が立つ。

「はあっ、ああ……変なところに、当たって……んっ……」

息を弾ませながら、全裸で腰をスライドさせる美紗緒。

たぶんこれも彼女の『勉強』の成果なのだろう。ソープランドでいうところの『タワシ洗い』というプレイだ。右腕のあらゆる部分を満遍なく擦り、たわしで洗うように達也の両腕を清めていく。

「やだ、これ……恥ずかしい」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!